

『震えるノド』 - 現楯松

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

あと四十分。あと四十分で終わる。二十時代だと社員以外は手持ち部沙汰な上、バイト終了時刻が近い。四十分もあつたら本が読める。読みたいのにこんな所で時間をもてあましている。

考え事、時計を見る、イライラしながらまた考える、というサイクルをレジに立ちつつ繰り返していると、こつこつという等間隔の音が意識に割り込んできた。音は数瞬の内に大きくなる。床を叩いて響く音。慌てて反応する。

「あ、はい、いらっしやいませ」

幸い客は気にしていなかったようだが、ふぬけた声を出してしまったことを恥ずかしく思った。

一人の男性客が、英字の入った円筒型の菓子を三つそろいでレジ台に並べる。ちょうど私の最近気に入っている菓子だったのでじっと見てみると、中年と言うにはまだ早い、どこにでも落ちていそうな顔立ちだった。顔に似合わず、と内心で笑いながらバーコードを読み取る。

「七百五十円ちょうどいします」

ちょうどどの代金がすぐさま眼下に置かれたので、「七百五十円ちょうどお預かりします」と顔を伏せたままレジに突っ込む。商品を袋に詰めて男に渡す。もう当分客は来ないだろう、と一つため息をついて頭を上げる。「ありがとうございます」と大声を出すと、声を届けるはずの客はすぐ目の前にいた。

「どうされましたか？」

何も言わない。少なくとも笑顔ではなかった。何を言いたいのか計りかね、笑顔を浮かべたままこちらも黙っていると、男はきびすを返して去っていった。

「相田ちゃん」

客が店を出て自動ドアが閉まったところでちょうど、奥の部屋から声がして振り向く。「あーあ」とでも言いたげな目をして店長がこちらを見つめている。

「何ですか、店長ちゃん」

店内を軽く見回す。客が一人もいないことを確認してから表情を崩した。

「テンチョー『ちゃん』って、いや、まだ俺何も話してないんだけど、何怒ってんの」

私の思っている以上に私はふてくされた顔をしているらしい。

「ちゃん付けはやめてください、あと私をからかって遊ぶのもやめてください」

「さん付けだとよそよそしいじゃん。あ、あれか、梅ちゃんって呼んでもいいの？」

他人からいきなり名前を呼ばれるとくすぐったくなる。古臭くて気に入らない名前だから尚更。

「苗字の呼び捨てでいいです。で、何ですか、また私、何かミスったんですか。さっきのお客さん、ちょっと怖かった」

店長が二回うなづく。

「あの人、結構ウチに来るんだよ」

「そうなんですか？」

「で、毎回ビニール袋に入れるのを断ってる」

言われてみると、何ヶ月も前、シールだけにしてくれと言った男性客がいた気もした。一度ではないとも思った。しかし、どんな顔だったかは記憶にない。さっき見た顔でさえ、最早よく思い出せない。

「三ヶ月くらい前からかな？ 自然と、あの人 cameたら何も言わずにシールだけにすることになってた。そんなもんだからちょっとイラッとさせちゃったんだよ。お客の顔は覚えないと駄目」

「記憶力悪くて。覚えにくい人間なんです」

「覚えるんだって」

店長のまっすぐな視線。彼からは時折真面目なアドバイスをもらう。真面目な言葉とは聞き入れるべき言葉でもある。聞き入れるべきだけれどつつい自虐やら冗談を使ってはねのけてしまう。

「私って、ここ二ヶ月くらい課題に追われてシフト入ってなかったじゃないですか」

「まあね。長いこと会ってなかったのかもな。けど、次はないよ」

次はない。ぽん、と釘をさされた。店長は笑顔であろうと唐突だろうと本気で物事を言う。次はない。次はない。きっと本当に次はないのだろうが、いまいち身に力が入らない。代わりに自己弁護が口をついて出た。

「私目が悪いんです」

「メガネかけてるのに」

「度が弱いんです」

言い慣れた言葉だった。次に来る会話も分かっている。

「意味ないじゃん」

「強いと目が痛くて」

わざとらしく「ははは」と笑ってごまかす。

「そう」

若干の沈黙。店長が口元だけ笑う。

「けどね」

たった一言だった。

目が悪い、弱いメガネにする理由がある。だから人の顔も自分の周りの物もよく見えない、覚えていられない、こだわってられない。そんな心の内を全部見透かされた上にたった一言で綺麗にひっくり返された。

「向こうはそんな事情を知らない」

確かに。当たり前なことだ。

「相田がどれだけ常識外れでも、言い訳は通用しないんだよ。ここは客商売だからね」

言い訳は通用しない。客商売。頭に残る言葉だった。

「どうしてそんなに視力悪いの」

真剣な空気がくすぐったいからだろうか、店長は急に話題を逸らした。

「本の読みすぎでしょうね」

「小説？」

「小説というよりは新書とか」

ひゅうう。彼はわざとらしく口をすぼめた。

「どうしてそっち系なの、小説は全然読まないの？」

「どうも小説は途中で放り出しちゃうんですよ。冗長というか、眠いというか」

結論が読みたいのに、一向にたどり着かない。読書量が増えてからはあまり読まないようになった。

「自然とノンフィクションまみれに。あ、歴史物はすごく苦手ですけど」

「ふーん」

若干つまらなそうに反応すると、店長は経理関連の作業を始めた。小説以外の話題は苦手なのかもしれない。

店長の作業がひと段落ついたのは、私がちょうど着替え終わる頃だった。気持ちよさそうに背中を伸ばす店長の目が、更衣室から出てきた私のそれと合う。

「君って普段からそんなカッコだっけ」

言われてみて、改めて自分の服を見る。この小さな輸入品店の制服は、ロゴ入りの紺エプロンを前にかけるだけだ。エプロンを脱いだ今、私が着ているのは青のタートルネックに毛玉の飾りを少々、そして黒くぶかついたジーパン。地味で貧乏くさいとしか言いようがない。

「可愛い服は嫌いなんです」

「見るからに人を寄せ付けなさそうだね」

「失礼ですね、そういうこと気にする男は要らないからいいんです」

「そうじゃなくて。あー、まあいいや。じゃ、次は一週間後ね。お疲れ様」

「お疲れ様です」

軽くおじぎをして店を出る。自転車に五分乗って家に帰る。体力のない私は、夕食と入浴を済ますとすぐ眠った。

店長の言う通りだ、自分は常識から外れていると思う。けれど、生活していく上で大衆側に寄り添う必要性を感じない。視力が悪い、服が地味。だから何だ、人の勝手だろう。誰かに合わせる必要があるのか。多少人と違って個性って言うはずなのに。むしろ何かを強制される私の方が被害者なんだ。視力が弱いから、視力が普通の人を基準にした町並みを目に入れることを強制させられ、目を疲弊させる。服がどうの、とハバにされる。社会で生きていく上で、個性をつぶさなくてもやっていけるはず。そうじゃないの？

目を覚まして置時計を見ると六時だった。携帯はどこにいったのだろう。三十分後に待ち受ける目覚ましをオフにしようと枕元を探すが見当たらない。机の上にもない。どこかに置いたままなのだろうか、と部屋を漁ろうとしてメガネをかけようとすると、メガネもない。メガネや携帯をいつも入れているハンドバッグごと姿がなかった。昨日、バイト先のロッカーで携帯を確認した記憶がある。しまった、ロッカーに置き忘れたんだ。

私はよく物を忘れてたり見落とししたり転んだりする。あわてんぼうとかおっちょこちょいとか天然などよく言われるが、結局のところ、目が悪くて見えていないだけだ。

それにしても困った。これではほとんどの人と連絡が取れない。いや、私は自分から連絡が取れないし、今日は何の予定もないから、誰かが連絡をして来ても繋がっていないということだ。メールも電話も、何が新しく来ようかと分からない。出かけても、知りたい時に時刻が分からない。

想像すると全身に震えが走った。分からない。心が安定を失ってコロリとよろめく。怖い。すぐに何か分からないことが怖い。分からないと知ってしまうことが怖い。

急いでバイト先に取りに行こうとして、今日が定休日であることに気付く。店長の連絡先は携帯のアドレス帳にしかない。今日は諦めるしかない、自分に言い聞かせて心を鎮めた。たかが通信機器ごときでこんな感情を抱いているなんて、携帯とは怖いものだ。

「誰かからメール、昨日、来てるかも」

誰かから、と言いつつも私にメールを送る可能性の高い人間は一人だけだった。時折ある学校関連の連絡を除けば、彼女としか日常の関わりがない。

「電話して確認、しなきゃ」

彼女と連絡を取れないことで何が起こるのかを知っていた。最も恐るべき事態を想像したし、それに近いことが簡単に起きかねないことも知っていたけれど危機感を感じない。「すべき」なのに「しよう」と思えない。現実を目の当たりにするたび、どこか遠いものだと感じるようになっていた。

まだ、彼女の起きている時間帯じゃない。きっと大丈夫だと自分に言い聞かせる。電話は二時間ほど後に回すことにした。

「本、読まなきゃ」

少しずつ買い置きしていた読みたい本が、机の上に横に山と積まれている。せっかくの春休みなのだから、残り少ない期間に一冊でも多く消化しなきゃいけない。そうだ、忙しさにかまけて読みすごしていた新聞も床に積まれているんだ。新聞はいい。たくさん、広い情報と知識と言葉が詰まっているから。新書もいい。たくさん、詳しい情報と知識と言葉が詰まっているから。早く読まなきゃ、なるべくたくさん本を。

裸眼では何も読めない。奥の手として机の端から運転時用の度のきついメガネを取り出してかける。これで矯正視力は人並みだ。滅多にかけないから目に負担はかかるだろうが、時間を無駄にしたくない。

一番読みやすく、一番早く片付きそうな本を探す。目が痛い。読まなきゃ。一冊を手にとって読み始める。一語一語に目を通したりせず、重要そうなところだけを拾って読んでいくと、実に簡単に読み終わることができる。頭が鈍い。次は何を読もう。何を得よう。

二冊目を終わると、ちょうど電話する頃合いになった。頭が重い。いつもに増して重い。慣れないメガネのせいだろう。うまく考えが回らない。

幸い彼女の電話番号は中学時代のアドレス帳に控えてある。番号をさりと覚えて固定電話の前に立つと、さっきとは別の危機感が急に胸を襲い出した。メールじゃなく、電話で会話するというのは、何もフィルターを通さず何もかもが直接自分に向かってくるということだ。

久しぶりに押す固定電話のダイヤルキー。一つ押すたびに鳴る電子音が少しだけ不安をかきたてた。そっと受話器を耳に当てて待つ。

「もしもし、佳織？」

「なんで今なの」

針のような言葉。思わず受話器から遠ざかりそうになる。昨日来たメールを無視してしまっただけ。佳織のスイッチを入れてしまった。

「ごめん、だって昨日、携帯バイト先に忘れてきちゃって。明日までは携帯で連絡取れない。ごめん」

「そんなの聞いてない。私、待ってたのに。何、あんた私を馬鹿にしてるの？ そんなにあんた偉いわけ？」

容赦のない攻撃的な言葉に、思わず泣きそうになる。電話なんてするんじゃない。

「無視するつもりじゃなかったの、ただ、その、今日になってから気付いて」

「はア？ こんなことしといて言い訳？」

「違うよ」

「そっちから『仲直りしよう』って言っときながら、言い訳ばっか。ウメはあの時とおんなじ嘘つきじゃない！ もう知らない、いい、知らないから」

まずい。電話を切られる。このままの状態ではおけない。

「佳織、ごめん、ごめん！ 落ち着いてちょっと話そうよ」

言い切ってから、失言だと気付く。

「話す？ 会うの？」

「う、ん」

怯えながら嘘をついた。本当は意地でも会いたくない。直接顔を見るところか電話でも話したくない。メールだけの関係に留めておきたかった。

「じゃあ、三時にキタミ駅前広場」

「うん」

断ることは叶わない願いだっただけ。

「絶対来てね。来なかったらどうなるかは分かってるからいいよね。じゃ、また後で」

言い終わると同時に電話を切られ、いつの間にかツーツーという音しか聞こえなくなっていた。手が、足が震えている。とりあえず力を抜こうと思ったら、そのまま脚の力まで抜け出て座り込んでしまう。電話を支える引き出しにもたれて膝を抱えた。一度大きく息を吐くと、震えは消えたが生気まで一緒に外へ拡散してしまった。

佳織はよく不安定になる。そのたびに、家が遠くさほど会う機会もない私にメールしてきた。私はそれを許容してきた。何を言われようとも。曲がりなりとも友達なのだから、助けようとした。「助ける」と言うなんておこがましい。けれどそれに代わる表現がない。

その時、世間一般に流布しているような人生における慰みの類は、知りうるほとんどを語ったような気がした。何か慰みを語るたびに安心して眠ると、一週間もしない内に元通りの文面のメールがやってくる。つまりは、佳織自身を含む誰かしらに攻撃的なメールが。

そうして伝える言葉が見つからなくなる。そのたびに言葉を探した。教科書以外の本も読むようになり、徐々にそういった本ばかり読むようになる。知識は増え、代わりに視力が急降下した。たくさんの人生への答えを知り、正しいと思える答えをいくつも手に入れる。今でも正しいと思っている。そして彼女に伝える。けれど彼女は変わらず、それどころかひどくなっていった。彼女にける言葉を探しては、その無力さに失望する数年間だった。

私は、彼女を守り続けるために自分を守りたかったのだろう、自然と彼女の攻撃性がかかわす術が身に付いた。会話のパターンができあがり、それに沿うのだ。

「そんなことをすると、〇〇が悲しむよ」

「ごめんね、今からバイトだから、お休み」

こちらの予想できる反応に持ち込むことができるならば、こんなメールを続けてもさほど苦にはならなくなる。その代わりに、私に直接攻撃性が向かうのを恐れ、メール以外での佳織との接触を拒否するようになった。けれど、それは彼女のためなのだ。彼女が私との繋がりを失わないように。安定を保つために。

佳織が私に、私が佳織にここまで執着するのは、佳織には私への恨み、私には佳織への贖罪を願う心があるためなのかもしれない。ただ、高校時代に彼女の至らない点を少し指摘しただけだった、と思う。何を指摘したのか、もうそれすら記憶に浅い。それだけで、彼女の根を支える何かを崩してしまっただけ。一気に負の感情が決壊した。彼女も私も落ち着いてから、間違いを指摘しても嫌っているわけではない、むしろ逆だから、といくら力説しても言い訳にしか取られなかった。

私が彼女の中に占めていた割合も知らずに非難したことが私の罪なのだろうか。あるいは、すぐに弁明しなかったことなのか。今もよく分からない。そして分かって強く思えない。一度壊れた物は元通りになるわけでもないし、今となっては最初の原因など堰を切る足がかりでしかない。

「三時、か」

時計を見ると九時過ぎ。まだ時間はある。それなのに今からもう落ち着きを失いかけている。何かを読んで紛らわそうと思った。一冊の半分を読んだ後、両目に激痛、頭に鈍痛が走る。今読んでも心身ともに磨耗するだけだと気付く。頭では意識していても、何か本を開きたい衝動は残る。積み重なる数えたくもないほどの本の背表紙を見るたびに、胃の辺りにプレッシャーを感じる。

読むことが好きなのか、読まなければいけないのか。自分の感情がぼやけてくる。家にいても辛い。本のことを考えなくてもいいように、どこか外に出ようと決めた。

最低限の荷物と身だしなみだけそろえて、まずは家の外へと踏み出した。太陽が空に顔を出している分、部屋よりも暖かい。屋外でも誰かと話せるだろう。佳織が来たらすぐに分かるようメガネをかける。徒歩五分の駅前に行くのには要らない自転車の鍵も一応携える。

どこに行くのかは一向に思いつかない。ショッピングをして色々なものを見て回る趣味はない。本屋に行くのは好きだがこれ以上何かに惹かれて買うわけにはいかない。何より頭が働かないし、動く元気もない。ナイナイづくしだ。

キタミ駅前ですっと待ってても、別に問題はないな。佳織より遅く着いてしまうよりはいい。自分に言い聞かせるようにして足を駅に向けた。

キタミ駅前には比較的広いスペースがあるので、よく待ち合わせ場所として用いられる。いくつも設置されたベンチの一つに腰掛けて辺りを眺める。たまには目を休めよう。家にこもっている時よりはるかに落ち着く。心の重い部分を、油とり紙のように吸い取ってくれる。

何もすべきことがないから、普段すべきでないとしていることに自然と誘われる。具体的に言うと、ただただ呆けていることだ。時間を無駄にすることだと考えると胸が苦しくなる。

メガネのせいで、じわじわと芯から両目が痛む代わりに周囲の細かな所まで見える。

すぐ横で壁沿いに立つ、高校生らしき年の少女の、なめらかにうねる巻き髪。薔薇をかたどった光る髪留め。手に持つ何かのブランドバッグ、そしてその幾何学模様。逆隣に植わる木にかけられた、品種説明のカード。見覚えのある名前。カードに何本もかかる黒い傷。葉の形。ゴミ箱の中には飲みかけのペットボトルと菓子袋。向かいのビル群の、奇妙なまでにまばらかつ明るい色彩。パチンコの看板にひつつく電飾の数。ビルと公園、歩道と樹木を分ける、等間隔に並べられた柵を目でたどると公園中に巡らされた迷路のよう。

新鮮だった。いつもと見えるものが全て異なっている。むしろ、普段は目に入るものが少ないから気にしていなかったのだ。これは違う世界。これが、多くの人が共有する世界。

今まで意識したことはなかったが、この駅と駅前広場は、建てられてから相当年月が経っている。それなのに不思議と古臭さを感じさせない。腰を下ろしているベンチだって茶色がくすんでいる。どうしてだろう、とぼんやり考えた。結論の出ないまま、意識が宙にたゆたうのに任せていた。

突然声が聞こえた。歌だ。有名な男性ボーカルの、恐らく題名は知っていても聞いたことのない歌。次第に、その音が大きくなっていく。意識が急に冴え、上体を起こし、地中に餌を探す獣のようにハンドバッグを漁る。その後ようやく、ここに携帯がないことを思い出す。大体、私は着うたを着信音にしたりしない。重症だ。

音の主は隣にあった。あの女子高生が持つバッグの中。私が見ている前で彼女はピンク色をした携帯を取り出して音を止める。色とりどりのストラップがぶどうの房のように垂れ下がっている。メガネのおかげでストラップの一つ一つまで目に入る。十字架とハートとマスコット、クマと猫とビーズと鎖と奇獣と方位磁針。最後のは何だ、変な組み合わせ、と心の中で笑う。少しずつ興味をそそられる。あまりに退屈で呆けているのも耐え難いものだから、さながら砂漠で一滴の水を与えられた人のように彼女を凝視してしまう。

胸元の開いたベージュのシャツに茶色のジャケット。丸みのある、形の良い胸のライン。ヒザ上十センチはあろう黒のスカートの下には、手入れの行き届いた細くて白い足。そこから視線を下に向けると焦げ茶色のブーツ。幸い、携帯に目を奪われて私の視線には気付いていないようだ。

さっきのはどうやらメールの着信音だったらしい。寒さに手を震わせつつ、ボタンを押しながら黙って画面を見ていた。画面を見つめるにつれ、つまらなそうにしていた顔に少しずつ光が射していき、頬が赤く染まる。彼氏からだろうか、それとも嬉しい知らせでもあったのか。

携帯を閉じ、駅の向かい辺りに視線をさまよわせる彼女。目に浮かんでいる期待感。時折携帯に目を戻して開いてみては、たくさんあるストラップの一つ、アメーバなのかカバなのか判別のつかないようなクリーム色の奇獣を左手でなでる。何度携帯を閉じても、触れるのはその奇獣だけだった。優しい動きで、顔には穏やかな幸せを漂わせ、まるで十年添い遂げた忠犬であるかのようになでている。

ああなるほど、と納得した時、ふと彼女は携帯をバッグにしまい、代わりにペットボトルを取り出した。液体は乳白色。ラベルには有名な清涼飲料水の名前。私とは正反対の、磨かれ飾られた爪、で当然ながら蓋を開く。本体を左手で握って口に運ぶ。本体が少し斜めに逆向き、口に中身が注がれる。

ワンテンポずれて喉が一つ、うごめく。飲み込む音まで私に届く。

急に自分の喉の渇きを自覚する。何かが飲みたくて仕方ない。飲みたい。私のバッグ。飲み物はない。自動販売機。駅構内にあったはずだ。いいや駄目だ、私は財布を持ってきていない。家の中だ。徒歩五分。ここから動く？ たかが飲み物のために。そんな自分は恥ずかしい。

私が欲求とプライドに板ばさみになっている間も、隣では二度三度と口に液体が注がれていく。本体が持ち上げられ、ゆらゆらと中身が減る。喉が鳴る。喉がうごめく。顔に視線をやると、満足そうな表情。ますます欲求が高まる。静かに憎しみさえ沸いてくる。何度も波打つその喉を凝視する。

急に視界からペットボトルが消え、思わず顔を逸らす。横目に彼女を見ると、バッグの中にしまい、代わりに携帯を再び開くところだった。

落ち着こう。胸に手を当て、深呼吸で精神を一度整えてから、改めて視線を真横に向ける。

彼女がちょうどそのタイミングでブーツの紐を直したのか腰が痛くなって屈んだのか私における真横の定義がおかしいのか眼球運動が命令に従ってくれないのかひょっとすると無意識がそうさせたのか理由など知ったことではない、けれど目に入ったのは彼女の喉だった。よりによって喉だった。

衝動で頭の中が再燃する。さらに加速して。抑制、礼儀、冷静などという言葉は弾かれていく。喉、喉だ。喉に意識が集中する。微小な動きにも反応して喉の中心を目が追いかける。何も聞こえない、感覚も視覚だけに凝縮されていく。

私よりずっと白い肌色の皮膚。右下部にピンクの湿疹がまだらに広がる。細い首輪のような横線が四本。細かい点状の数え切れない凹凸。これが彼女の、外と内、生と死の連結部。

時間の感覚などないから計りようがない。それでもずいぶんと時間が経って、急に喉が動いて視界の上に逸れて、目が追いつく。

「ごめん」

唐突に喉の近くで声が聞こえた。着信音じゃない、現実そこに居る男の声。ハッと目のピントを喉から遠ざける。けれど私の目には彼女の喉が焼きついたままで、視界が二重にぶれる。喉の画像のその奥で、彼女の前に一人の男性が立っていた。

「ケンジ！」

彼女が口を開く。思えば彼女の声を聞いたのはこれが初めてだ。楽器のような高い声だった。彼女の声を聞いて、背の高い彼氏の申し訳なさそうな顔が一度にほころぶ。

「じゃあ、行こうか」

すっかり幸せそうな顔になる彼氏。ますます幸せそうな顔になる彼女。二人はじっと見ている私のことなど無視して、手をつないで視界からいなくなる。目には彼女の喉だけが映る。慌てて二人の動きに合わせようとした、その時だった。

私の目の中にある彼女の喉が、ぶるりと震えた。何かに身震いするように。

ケンジ。

喉の上に彼女の口が現れ、スローモーションで、はっきりと口の形を変えてしゃべる。唇の上でかかかとしてグロスが光る。無数のシワが伸縮する。少し乱れた並びの白い歯。歯の間にこっそりのぞく舌には、ピンクの凹凸。彼女の口は彼女とは別の生き物のように動いていく。

彼氏の顔が、悲しみから喜びへとゆっくり変わっていく。目も鼻も口も頬も。少しずつ、あるべき表情に組み立てられていく。

私は幻覚を見るほど疲れていただろうか。驚きを抱きながらスローの光景を見る。喉が震え、声を発し、彼氏が笑う。何度も何度も同じ映像が目の上を走る。思考は停止し、目は眩み始め、次第に黒ずんだ感情すらも頭から追い出されて頭が真っ白になる。全ては映像に集中させられていた。

ケンジ。

ケンジ。

たった一言。それなのに。

(佳織)

メールの中で何度も呼んだその名前。この三年の間、一度だってあんなに嬉しそうな感情を返してくれたことはなかった。彼氏のゆるんだ笑顔がまぶしい。何故だろう、何がそんなに違うというの？

(佳織、ごめん、テストが近いから忙しくて。手が離せない)
(佳織に構うのは何故かって？ 当然のことじゃない。友達なんだから、理由なんて要らないよ)
(ごめん、佳織。ごめん。あんな態度をとるつもりはなかったんだよ！ 別に、みんなの前だからってわけじゃなくて……)
記憶に強く残る私の言葉が頭をよぎる。そして二人の映像と共に頭を反復する。
ごめん。
ケンジ！
じゃあ、行こうか。
あの二人の会話と比べてみても分からない。しばらくすると、私たちの会話と二人の会話が目前に現れるようになる。パソコンで打ち出されたように整った字体の言葉が、喉の映像をバックにぐるぐる目の前を回転し出す。まるでコトバのフラフラプ。
分からない。大して言葉に差はないはずなのに。声が聞こえるから？ 時々私だって佳織と電話で話すことはあった。直接会っているから？ 会って話すこともあった。

けれど、本当は考える必要なんてないのだろう。何が違うのか、だから何が言えるのか、私はその答えを知っている。答えに心が近づきつつある。ただ、頭が認めようとしなだけ。

突然、繰り返されている映像が変化した。目の前を回る「ケンジ」と「佳織」の言葉が、音もなく分離した。「ケンジ」は「け」と「ん」と「じ」に、「佳織」は「か」と「お」と「り」の三文字に。

(認めたくない)
そう考えても、私の思いは言うことをきかない。
輪の中の言葉が全て、ひらがなの一文字一文字に分離した。
かおりにかまうのはなぜかって？
べつに、みんなの前だからってわけじゃなくて……。
けんじ！
回り続ける。私の理性をさいなむ。私の心が自己を主張していく。
(でも、)

頭が否定しようとしかけた時、視界が、爆発した。回る輪を構成する一文字一文字が、いっせいにアルファベットの域にまで砕け散った。

KとEとNとJとIに。KとAとOとRとIに。綺麗に整った文字にバラけた。言葉の輪は一度に崩れ、視界中に飛散して漂い、何も読めなくなる。これでは意味を持たない。

そう、幻覚も見せているように、言葉なんて文字の集まりでしかない。言葉自体に意味はない。

だから。
少しずつ、記憶の沼から色々な過去が掘り起こされていく。佳織に話した言葉の数々、本を読んで探した言葉の数々、そして佳織の反応。徐々に、自分への怒りと佳織への申し訳なさが涙と一緒にこみ上げてきて、叫びたくなった。
「私は、言葉のために、たかが文字と音の集まりを伝えたいがために佳織と会話したかったんじゃない！」

私は言葉を捜しては失望していた。そんなの、失望するような言葉の使い方を私がしていただけのことなのだ。

言葉自体に意味はない。言葉が意味を持つのは、言葉が届くまでに意味を帯びるから。だから人に何か伝わる。説得力を持つ。言葉は人との間を取り持つ媒介でしかない。大切なのは、何と何を繋げるか、伝えるか。何をどういう意味に取るか、感じるか。

私が今まで佳織に与えて来たのは、ただの空っぽの器。どこかしらから器だけ取り

出してきた、そこに繋がっていた意味も、繋げようとするのも全部引きちぎって手渡してきただけ。何かを伝えたいためならば、器すら要らないこともあるとも考えず。ただ探し続けて、手段と目的を取り違えていた。

そんなもので二人の世界を繋ぎ止めてきた私は、どれだけ酷い人間だっただろう。離れたい離れたいと思う彼女を縛りつけ、期待させておいて実感できないことばかり言い、生殺しにしていたのだ。

その時、また幻覚を見た。ぼうっと浮かび上がる丸い光と共に見え出したのは、彼女と彼氏の姿だった。さっきまでとは全然違う映像。スライドのように次々と、視界中に所狭しと映されていく。

ためらいがちに、今は彼氏となっている男に彼女が告白をする。それに顔を真っ赤にしながらかーケーサインを出す彼氏。初めて電話をかける。初めて二人きりだけで会う。遠くへと旅行にも行く。進展があるたびに頬を染める。ケンカもするようになる。本気で怒って、時には手も出て、そのたびに後で泣く。色々ある。数え切れない出来事がある。

頭の中が映像でいっぱいになる。さらにスライドが現れてくる。プレゼントをもらった。変な動物のストラップだけど、大切なものができる。会う約束をして、キタミ駅前で待ち合わせをする。なかなか来ないから不安になる。携帯を確認すると、用事が長引いて遅れるというメール。待ち遠しかった。

そこへ、空から音が降ってきた。

ごめん。

彼氏の声。彼がそこにいる。頭の中の映像がぐるぐると回りだした。円を描きながら、少しずつ中心に凝縮されていき、最後には一つの球になる。球はすると私の頭から首へと下に下りてくる。首に着いた所で球は進行方向を斜め上に変える。そして。

私の喉が、それどころか、私をまとう空気、私の中に満ちる空気全体が、ぶるると一度大きく震えた。

何かを怖がっているわけじゃない。何かを発したくて伝えたくて仕方なくなって、悶えて耐えられなくなる感覚。だから震える。空気が爆発する。たった一言、たった三つの文字に集約される。

ケンジ。

音を発して。

ぼんやりと、真っ白な中に人影。佳織だ。佳織が目の前に立っていた。腰まで届く、丁寧に梳かれた髪を風に任せ、冷やかさを思わせる服を着て。

次第に視界がにじんでくる。涙がメガネにも流れているのだろう、どんどん何も見えなくなる。佳織の姿がかすんでいく。

ごめん、ごめん。彼女に対してつい謝ってしまう。そこにいるのに無視してたんじゃないよ？ これはメガネが……。

「相田がどれだけ常識外れでも、言い訳は通用しないんだよ」

店長の言葉を思い出す。今は客商売じゃないけれど、一緒のことだ。人と人が何かで繋がっている。

佳織は視力がずっと良い方だった。見えている世界も、意味の取り方も私とはかなり違うのだろう。多くの方は、私よりもはるかに、視覚に頼って生きている。ずっとしゃべっているわけじゃない。言葉よりも見えるものの意味が大きい。

佳織の世界には私も入っている。感じているものの何が違うのかを説明することはできる。説明し続けることはできない。時には佳織たちと同じ世界を見ないと、見てみる努力をしないと、今までみたいになんかを見落としたり誤解されたりするのもかもしれない。

「ウメ？」

はっと目を覚ますと、ベンチでうつむく私を誰かが不思議そうに見下ろしていた。

佳織本人だった。涙が乾いてうまく見えない。慌てて服のすそでメガネを拭く。

私を見つめる両目は子どものように見開かれていた。丸くて可愛らしい。電話で感じたあの剣幕は微塵もない。もしかすると、私の中でできあがっていた佳織の印象は、私自身の言葉と態度で作りに上げていただけなのかもしれない。不思議と私の心は落ち着いている。佳織の目、さっき見た幻覚のせいもあるだろうが、二人を取り囲む明るく和やかな駅前広場のおかげでもあるような気がする。

私は眠っていたのか呆けていたのか。よく覚えていない。幻覚の中で得た鮮烈な感覚だけが体と心を支配している。

さっき見た夢を思い返しながらか、佳織の顔を改めて見る。記憶の底から無数の欠片が浮かび上がってくる。佳織と出会ってから、何があったのか。どんなことを喜び、悲しみ、学んできたのか。佳織の知らない時間に私は何を感じ、私の知らない時間に佳織は何を感じたのか。どんな世界の見方をしているのか。私に何を伝えられるのか。どうやったら伝えられるのか。

ぶるぶると、喉が震えだした。喉を中心に震えが伝播し、肌が粟立つのを感じる。自分のメッセージが、世界が凝縮され爆発しようとしている。それはどんな形だろう。言葉だろうか、行動だろうか。もしかすると小説のように長く連なる言葉になるのかもしれない。

形はまだ見えてこない。もっと喉が震えればいい。もっとこの振動が彼女に伝わるように。

[戻る](#)